

話題

日本保健物理学会第43回研究発表会を開催して

大会長 伊藤 哲夫 *1

1. はじめに

2009年6月3日(水), 4日(木), シェラトン都ホテル大阪において第43回研究発表会を開催致しました。会期直前に関西地区において新型インフルエンザが集団発生するという混乱もありましたが、お陰様をもちまして270名の参加者をお迎えするとともに、28の企業・団体から多大な協賛・協力を賜り、無事開催することができました。以下、研究発表会を開催しての感想を述べさせていただきます。

2. 開催の打診

2007年のそろそろ寒い風が吹き始めた頃、学会副会長である当研究室の杉浦先生から「沖縄大会の次、2009年の保物の研究発表会、そろそろ関西でやる番だから、大会長をお願いできませんか。」と打診がありました。聞けば、関西圏での開催は小田前会長が大会長を務めた2004年の神戸大会以来、5年ぶりのこと。関西地区では古くより保健物理関係者の強いネットワークが根付いており、近畿大学としても名誉会員の西脇安先生や理事経験者の本田嘉秀先生をはじめ非常に多くの方々が保物学会において活躍してきたところです。

原子力カルネッサンス、原子力分野の人材育成というキーワードが聞かれるこの時期に、関西に深く根付いている保健物理関係者の方々が今一度心をひとつにして、大きな行事をやらせていただくのも良いことと考え、お引き受けすることとしました。その意図は、「しばらく休んでいたけれど、再入会します。」「久し振りに、ボスターを出します。」などと、図らずも予想以上の成果が得られたようです。

3. 準備の開始

1) 会場の手配

まず考えたのは、どんな学会にするかでした。これに

ついては、「特別なことはしない。派手なことはしない。淡々とこなす。ロジスティックスさえ用意すれば、中味は参加される学会員の方々が作ってくれる。」と考えました。この考え方に基づき、会場は近畿大学の11月ホールを当初確保しました。11月ホールは収容人員1,200名の大ホールの他、中ホールや種々の会議室を備えており、国際会議の会場としても使える立派なものでした。大学を会場として行う唯一の難点が懇親会でした。街中に移動すれば参加人数はおそらく減ってしまうだろうし、学内で行うとすれば大学食堂で唐揚げ中心のメニューになるけど仕方がないかなと…。

そういうするうち、保物学会では法人制度の検討が進められ、検討が最も早く進めば、研究発表会にあわせて開かれる総会において、法人化の決議がされるかもしれませんと聞かされました。可能性は分からぬけれど、組織としての節目の祝賀的な意味合いのある懇親会に、メインのメニューが大学食堂の唐揚げでは、将来が思いやられます。急遽、シェラトン都ホテル大阪の空き状況を聞き、研究発表会のサイズに見合った部屋を確保しました。「これで、懇親会は安心だ。」もっとも、一流ホテルを使うことにより会場配置・設営や案内など実行委員会側の負担は相当に軽減されますので、この会場変更は正解であったと考えています。

2) 実行委員会

次に、実行委員会の組織です。近大内の昔からの学会員だけでなく、近大原子力研究所の教員には全員、保物学会に入会してもらい、実行委員をお願いしました。外部からは、主としてプログラム担当をお願いする大学・研究所の先生方、主として会場関係をお願いするメーカー・企業の皆様方にお願いし、実行委員会は総勢32名を数える多くの皆様にご協力を頂きました。実行委員会の会合は都合6回にのぼりましたが、毎回出席率は9割を超えるより良い企画へとアイデアを出し合い、また心配事は些細なことまでひとつひとつぶしていきました。回を重ねるごとに、当日の会場の様子が実行委員の皆様の頭の中にも浮かび、当日のスムーズな運営に結びついたとともに、実行委員会としての一体感も生まれてきました。関連企業からはさらに、当日、実行委員以外に現地委員として会場係など21名の方にお手伝いを頂きました。実行委員、現地委員の皆様には、この紙面をお借りして深く御礼を申し上げたいと思います。

4. 新型インフルエンザ勃発

GWが明けて、PCを中心とした機材・備品の準備、当日の人員配置、進行の打合せなど、細々とした時間の

Tetsuo ITOH: A Report on the 43rd Annual Meeting of Japan Health Physics Society.

*1 近畿大学原子力研究所: 大阪府東大阪市小若江3-4-1 (〒577-8502)

Atomic Energy Research Institute, Kinki University; 3-4-1, Kowakae, Higashiosaka-shi, Osaka 577-8502, Japan.

かかる作業に近大原子力研究所の実行委員は取りかからなければいけない時期となりました。そこへ新型インフルエンザが神戸・大阪を襲ったのです。大学は1週間の臨時休校となり、メディアは毎日、兵庫で何人、大阪で何人新たに発症と報道します。会員諸兄から「予定通りに開催するのか。」「所属機関から大阪方面への出張自粛勧告が出されたので、発表をキャンセルしたい。」と様々な問い合わせが寄せられました。府内の学校の休校など最も緊迫した時期から開催まで2週間あったので、必ずや事態は沈静化し、予定通りの開催はできるものと信じていましたが、理事会とも協議の上、事態の推移を慎重に見極めていくこととしました。もし、そのまま感染が拡大していたら、延期あるいは、参加者激減で大赤字覚悟の開催となっていました。幸いにも一旦沈静化の様相を示し、大きな混乱もなく、無事に大会当日を迎えることができました。

5. 大会の概要

話が途中になってしまってましたが、会場を変更し、実行委員会で議論を進めるうちに、研究発表会のメインテーマが必要と感じるようになりました。法人化の検討が進む中で保物学会の組織としての現状と将来像、そして、そこで高度化され広く展開・実践されていく学問としての保健物理について考える機会として頂きたく、「保健物理の今とこれから」をメインテーマとしました。

学会の日中韓連携プログラムにより2か国を招聘する順番と言うことで、「アジアの放射線防護の現状と将来」のシンポジウムを初日のメインイベントとしました。ビザの関係から中国からご参加頂けなかったことが残念でした。その他、学会の常設委員会、専門研究委員会、若手研、学友会など活発に活動が推し進められており、企画セッションのお申し出が本当に数多くあり、口頭発表を含めて時間枠に割り振ると、会場の空き時間はほとんど残らない状況でした。しかしながら、常々保健物理(学会)では原子力分野と同様に医療領域の放射線防護も大切な一分野であるべきだと考えていましたし、寄せられた企画のテーマ一覧から唯一手薄ではないかと考えましたため、実行委員である近畿大学医学部の細野眞教授にとりまとめをお願いし、実行委員会企画シンポジウム「放射線の医療利用と最先端とその安全」を企画しました。

紙面の余裕がなくなってしまったが、どうしても触れておかなければいけないのが、懇親会です。沖縄大会の際のご挨拶で「大阪らしく、近大らしく」と申し上げました。近大らしくには、水産研究所が世界に誇る「完全

養殖マグロ」を幸いにも手配することが叶い、皆様にご賞味頂くことができました。マグロに若干かすんでしまいましたが、同じくカンパチやキンダイ（近大による交配種）も覚えていて頂ければうれしく思います。大阪らしくについては「大阪うまいもんの歌」を用意しました。韓国からのゲスト、NA先生は耳についてしまったらしく、翌日、司会をした杉浦先生にもう一度歌ってくれと言ったとか…。

優秀ポスター賞の副賞（豪華賞品？）としてお出しした近大原子力研究所のマスコット「1ワットくん」を末永く可愛がって頂ければ幸いです。

6. おわりに

人類にとって必要不可欠なエネルギー源の有力な選択肢である原子力を支える保健物理、また医療をはじめ様々な放射線利用においても欠かすことのできない保健物理、21世紀の安全・安心な社会を確固たるものとするためになくてはならない保健物理。我が国においてその発展の中心的役割を果たしてきたのが保健物理学会であると信じています。慣例により議長を務めさせて頂きました総会の議論を拝聴して感じるところですが、公益法人制度の改正という個別の理由にとどまらず、現代の社会の大きなうねりの中で、組織や団体はその存在意義を活動の成果としてはっきりと示していくかなければならない、非常に厳しい時代を迎えていると思います。現執行部はその対応として、学問としての研究活動のさらなる活性化、人的資源としての会員数の拡大など、地道な基盤整備にまず力を注ぎ、組織・団体としての変革につなげていきたいとのお考えと承りました。

来年度はAOCRP-3にてアジア地区を包含した国際会議を開催し、再来年度は保健物理協議会設立から50周年を迎えると聞いています。その半世紀に及ぶ日本保健物理学会の歴史の1ページにささやかながら足跡を残したことへの満足感と安堵感、そして将来の必ずやの発展への期待を記して、大会長印象記を終わらせて頂きます。

伊藤 哲夫（いとう てつお）
近畿大学原子力研究所 所長・教授

